

2021 October

10月号

春燈



成瀬櫻桃子の句

手毬つく十まで数ふことできいて

『素心』昭和五十六年

「娘十九歳」との前置がある。

長野県別所の勉強会のこと、ホテルのロビーで櫻桃子先生が電話をしておられるのを偶然聞いてしまった。「終わったらすぐに帰るから待っていてね」と、やさしく話しかけていた。相手は三歳の時にダウン症と診断された愛娘美菜子さんと思われた。どんな時も美菜子さんの成長を見守り寄り添う父親の姿がそこにはあった。

木村 梨花

成瀬櫻桃子の句

子の霊にルルドの泉供へけり

『素心以後』平成十四年

長年宿病の病の中に過ごしたいという我が娘の為、予て聞き及ぶ癒しの靈験あらたかなルルドの泉を与えたく思ひ乍ら生前は果たせなかつた。今、せめて来世の歩み安かれと祈りつつ我が子の霊に供えるこの泉、切々たる父情の悲しみを偲ぶとき、一読目頭の熱くなるのを覚えます。

齋藤 晴夫

安立公彦



五輪旗を仕舞ふ若きら晩夏光

七夕竹の写真に旧りす父の句や

草丈の伸ぶるに任す残暑かな

沙羅の花淡き詩情を浮かべ咲く

雨過ぎの夕べ星呼び日日草

燈下集

○ 西川保子

色鳥や朝の空より佳き声を（祝・てい女様）

新刊書の手触りめきぬ秋の風

赤蜻蛉かき消え空の残りけり

読み返す信書一通残る蟬

星月夜ゴッホの杉の天を指す

○ 佐藤信子

疫病退散祈願護摩火逆巻く大暑かな

露座仏の伏し目に在す夏の虫

初蟬や江戸の名残の庭の松

地下足袋の大きな跡や木下闇

全容の富士真向ひに夏薊

○ 園部露郷

俳句もて勇気いたたく敦の忌

十一鳴く笛の音色を繰返し

須川嶺は天空の景お花畑

一掬の清水冷たし小町塚

銀漢に父星けふは姪の星（有川三枝子逝く）



○ 片桐てい女

夜の秋や新日本髪の館の順

霍乱や旅のまじなひみな快癒

霍乱や在所の呪ひ慣らふべし

霍乱やまじなひ効いて夜はカレー

縁台将棋立見の指示に大拍手

○ 松橋利雄

師の回忌詠むはさだめか百日紅
やんはりとかはす言訳ソーダ水
川波の夕映ゆ土用太郎かな
笹舟の小流れ速し夏休
筆まめな友へ拝復雲の峰

○ 橘正義

梅雨傘や接種の腕をかばひつつ
乗り遅れ梅雨のホームの椅子固き
順調にはかどりし帰途梅雨の月
たどたどしき初蟬の声聞きもらさず
硝子戸の大夕映も梅雨の果て

○ 三上程子

棟咲く頃か過ぎたか敦の忌
氏素姓秘めて巻かるる落し文
湧くだけ雲湧かせ凌霄咲きのぼる
こころざし少し落としてラムネ抜く
河童忌の鼻むずがゆくなりけり

○ 中野あぐり

にら咲いてはや暑に負けてをりしかな
白睡蓮水の濁りを寄せつけず
谷中生姜噛みて齢を諾へり
茸飯ひとりに炊くは流寓めく
ちちろ鳴くひとりごころの募りけり

○ 河本由紀子

梅雨は明けわが喪はあけず経を上ぐ
ねぶた出陣ねぶた凱旋静と動
子の還暦に息呑むおもひ涼新た
君逝きて仰ぐこと増ゆ月の秋
振り向かぬ後ろ姿や夜半の月

○ 永井恵子

甚平の肩の尖りや夕ごころ
百足虫出る親の敵のごと打てり
遠縁の人の饒舌蟬時雨
蜘蛛の囲や間口の狭きレース店
朝顔に有刺鉄線手を貸すや

○ 荒井ハルエ

朝明けの夏草鎌に香りけり
いく度も闇に身を打つ金亀子
ヒマワリ千本ゴッホに手向けたし
空蟬や隠しおほせぬ疵ひとつ
ワクチンの微熱のほてり晩夏光

○ 持田信子

白百合に包まれ姉は黄泉のくに
青簾犬も膝つき喪に服す
髪洗ふ美容師の指姉かとも
茄子の紺姉を師とせしこと多し
玉葱を吊して姉を偲びけり

○ 石田康明

ワクチンの素性ともあれ梅雨晴間
巣ごもりの暑中見舞に養命酒
雷鳴の曲に手拍子ウィーンフィル
エッフェル塔から臍が欲しいとはたた神
難解な句ほど深奥真葛原

○ 平沢恵子

きれぎれの夢残りぬる明易し
黒揚羽音なく昼をゆらしゆく
青柿のごろんと音のさびしがる
睡蓮や人影のなく日の暮るる
階を白靴しかと聖火台

○ 宮崎洋

雲の峰越えて故郷を捨て来しを
旅靴置いて涼しき駅ピアノ
オリーブ植えて白南風の新居かな
片雲の去り夕爾忌の晩夏光
夕爾忌や過ぎし白雨のかをる夜

○ 中里よし子

生命線の長きを見つめ生御魂
夏枯の花も笑まふや夜の雨
河鹿鳴く恋を哀しとおもふとき
燕巢立つ彼らに会ふ日ありやなし
みだれ萩揺らぐこころの奥に咲く

○ 木村みどり

白服やチャペルの多き港町
白南風やカレー自慢のレストラン
土用波乗こなしたる選手かな
母の手の文字の薄るる梅酒瓶
天花粉たつぷりはたき乳吸はす

○ 大西由美子

木道の果ては何処や大夏野
単帯ざつくり締めて好い加減
傘傾ぐ狭き木道花菖蒲
ワインドーに正す夏帯逢瀬かな
高原のリフト軋むや夏の果

○ 池上昌子

陸橋の下で体操梅雨最中
合歓咲くや何時しか人の住まぬ家
山頂まで人の群れ成す山開き
麴粉育ててくれし祖母偲ぶ
セブ島の海に遊ぶや夏の果

○ 近藤真啓

絶滅の鳥の化石や油照
すててこや履歴書になき句歴欄
噴水のごとき抱負を認むる
また父は母に叱られ扇風機
「コリほぐします」の看板夕焼雲

○ 山下健治

ひまはりや五輪戦士の金メダル
多摩川は水豊かなり濁り鮒
日の匂ひ湖に溶けゆく大暑かな
北前船の往時語るや夏座敷（鳥取赤橋町）
高きよりのぞむ漁火宵涼し

○ 小林紫乃

月涼し二人の影を見失ふ
蟬の穴はしやぐ媼のイヤリング
振花や首が振れてしまひさう
梅雨晴間大谷選手のホームラン
八ヶ岳仰ぐ湖畔の晩夏かな

○ 山下朝香

駅広場アンネの像に男梅雨
目で追ふや夫の背に似る白紗
掌にほのと石鹼の香や梅雨明くる
天を突く鉾立ちしまま黙の京（祇園中辻）
打水に花街の灯の映りけり

○ 佐俣まさを

小流れに雨後のしぶきや額の花
にはか農夫腰に下げたる蚊遣香
半夏雨鴨居に吊るす農曆
涸沢を這ひ上がる雲岩魚喰ふ
旅衣畳み直しぬ夜の秋

○ 田中嘉信

朝まだき一気に開く百合の花
百合の花の群なす日比谷祝五輪
引力に逆らうてみる大噴水
花菖蒲ことに白きが際立てり
少年のキャッチボールや雲の峰

○ 山浦紀子

担々麵の大盛り安房の日照草
パプリカの花に溺るる昼の蟻
やはらかき羽落としゆく鴉の子
自販機に朝の光や蛾の骸
嘶家の政治論議に打つ扇子

○ 室井津与志

フクシマの復興五輪夏の天
噴水の水は生きをり伸び縮む
けふもまたメダル自慢や蟬時雨
昼寝覚インカの旅の甦る
天高し国技に燦と照ノ富士

○ 中上霞子

心字池に河骨一花抽ん出る
昼寝覚体内時計狂はする
胃の腑までゆき渡りけり冷し酒
何処となく悪人めくやサンガラス
表札は夫婦別姓揚羽蝶

余言 安立公彦

全容の富士真向ひに夏薊 佐藤 信子

「全容の富士」に、何時か見た霊峰富士の面影がすつくと浮かぶ。今更書くまでもないが、その円錐状成層火山は三七七六メートル。霊山と呼ぶにふさわしいその姿は、私たち日本人の生活に深く根付いている。

いま作者は、その富士を真向ひに見つめている。ふと視線を落とすと、そこには紅紫色の薊の花が咲いている。視界を彩る夏薊と富士の姿は、まさに「全容富士」である。今、その姿を留める霊峰富士を見ながら、作者の思いは、豊かに満ちて来るのだった。

師の回忌詠むはさだめか百日紅 松橋 利雄

もとよりこの「師」は安住敦先生。昭和六十三年七月八日、八十一歳。葬儀は目黒菩提天寺で催された。師の柩は、当時まだ若かった作者や私達が、家から表通りの葬儀車迄担いだ。意外に軽かったことに、師のご苦労が感じられた。

本屋」とあるから、主体は古本屋である。古本屋のある村とあれば、郊外の地だろう。古着と古本屋の並列が、村里の様子を伝える。しかし村里と言っても古本屋のある村は近代化も及んでいだろう。テーマが心地好い。

足場組むとびの気合や朝曇 荒井 慈

「足場」、「とび」、共に建築用語。足場は高層の建築工事の際、パイプや丸太などで組み立てる仮設の構築物。とびは「鳶職」。高い足場の上で構築に当たる人。

この句、中七に、「とびの気合」がある。かなり大きな建築物の足場を組む鳶職の心構えを現したものだ。都市部での工事では、足場の用法にも変化がある。「とびの気合」に、工事現場の安定化が伺えよう。季語の「朝曇」も、その「とび」の心構えを善く支えている。

夏瘦を友に問はるるレモン水 神田 恵琳

「夏瘦」は、暑さのために体が衰弱して痩せること。「夏負け」とも言う。へ着こなしの上手に夏を痩せにけり 真砂女。着こなしの用法がみごとだ。

掲句。レモン水を飲みつつ、久闊の友と話題が盛り上がる作者。ふと作者の夏瘦せを問われる。夏瘦せは病いではない。親しい友との会話にふさわしい用語と言えよう。作

この句、「詠むはさだめか」に作者の思いが善く感じられる。さだめは定め、「運命」と辞書は記す。しかし普通に受けとる運命とは異なる。その教えの奥深さは、教師の文学観に及ぶ。回忌の日、師のねむる祐天寺を思いつつ、庭前に咲く百日紅を仰ぎ見る作者。その胸中には、句碑の〈てんとむし一兵われの死なざりし〉が浮かぶのだ。

便箋にのこる筆庄晩夏かな 近藤 牧男

世はパソコンの時代。便箋に手紙を書くことは、時代とともに頻度を下げている。しかし世上全てがそうとも言えない。この句、手紙を書いてその便箋を仕舞おうとして、自らの筆庄に気付くのだ。一面筆庄の残る手紙は書き手の熱意を示すものとも言えよう。作者の思いはここに来て揺れる。立秋も近くなつた。書齋の窓から見る月も、一頃より明かりを増している。しみじみと晩夏を思う句だ。

村暑し古着も扱ふ古本屋 廖 運藩

「古着屋」、「古本屋」。一字違いだが内容は衣類と書籍。作者は台北在住の燈下集作家。春燈台北句会の指導者だ。日本における「立秋」は過ぎたが、残暑は続いている。「村暑し」に台湾の天候の状態が感じられる。「古着も扱ふ古

者の応答は記していないが、笑みつつ答える作者の姿勢が感じられる。然りげ無い「レモン水」が善い。

むらさきは喜寿の色とよ茄子の花 小島 昭夫

「喜寿」は七十七歳をさす言葉。ちなみに八十八歳は「米寿」、九十歳は「卒寿」、九十九歳は「白寿」。

この句、「喜寿の色」が善い。昔は七十歳と言えば、杜甫の「人生七十古来稀なり」と祝われる年齢だった。掲出句、「むらさきは喜寿の色とよ」とある。喜寿の文字は、「喜」の字の草体「岳」が「七十七」と読まれるからとのこと。それはまた茄子の色でもある。茄子の葉は淡紫色、花も実も紫黒色、それはこの句の示す通りである。

黒揚羽音なく昼をゆらしゆく 平沢 恵子

「黒揚羽」は全体黒色、幼虫は柑橘類の害虫。夏によく見る。この句、「音なく昼をゆらしゆく」の表現がみごとだ。「昼」が善く効いている。物の対比という見方からしても、昼という時間の区分と、揚羽蝶という軽量でも生命のある蝶との対比など、普通には考慮の外にある。しかし私たちの住む地球上には、物の大小はあっても、それぞれ「私」を持つていて、その動きを、この句は表現しているのだ。物の存在に大小の区分はない。

当月集

安立 公彦選



○ 大谷満智子

紅白に凜と揃ふや百日紅
百寿の空あをあと透きカンナ燃ゆ
八月の海に手を振る佳き日かな
新涼や茅織布巾下ろしたて
色鳥の夢の続きのふくらめり

○ 西谷恵美子

紫式部気品ゆたかに咲きにけり
烏瓜暮れてレースの花咲くや
蜘蛛の囀の張られつばなしや池の上
通過するラッピング電車大西日
海開き十年の時超え波静か(陸前高田)

○ 向井芳子

朝涼やマジヨルカ皿の鳥レモン
校門のくちなしの香に落ち合ひし
萎えかかる気を引き立たせ百日紅
ひまはりに応援されて縄跳びす
空缶に足取られぬる草いきれ

○ 古谷昌女

オペ室の金属音やさみだるる
病み伏して大夕焼の中にあり
夏休み今日からボクはオレになる(曾孫九歳)
辱め受けたら死ねと敗戦日(十六歳)
亡き夫の抑留の手記敗戦日(三年間ソ連に抑留)

○ 柿原よし子

夫の忌に冷酒一杯供へけり
幼児の口元見えぬ蓐手に
くさぐさを活かす水盤どこへやら
リハビリに通ひし道や棕櫚の花
楚々と咲く金柑の花見つつをり

春燈の句

安立 公彦選



福井 西本 花音

鳴き砂の浜に寄する波晚夏光
手火花や夕べの匂ひ残る路地
席入や羅の裾ととのへて
切札は使はずにおく今朝の秋
遠ざかる夕日を追うて蟬しぐれ
突然の風に噴水振れけり
あめんぼう寄りてなにやら漢字めく
煤けたるソーダ瓶より蝮酒

兵庫 橋本貴美代

京都 西村 洋平

夏至の日や全方位なる夕茜
コロナ退散と銚の粽の男文字
小康を笑ひころげる船遊び
北口のからくり時計夕立かな
滴るや驟雨のあとの静けさに
茅葺きの青き畳で昼寝せり

岐阜 高井 修一

茨城 関 道子

荒波に競技おそれぬサーファーや
今更に甘き梅干好まるる
足弱と成りゆく不安夏蓬
門川のあらばと思ひ水を打つ
コンサート歌手の香水届く席
朝顔に屈みて祖父の声を聞く
爪痕の変はる地形やあばれ梅雨
どん底より綱取る力士夏相撲
大西日玻璃に木洩れ日ゆれにけり
かはたれの草取る肺腑清々し
散歩する人も無き庭初つばめ
モードより着心地好む夏の服
つくばひに添ひつつ開く花菖蒲
老いて尚白靴好み今日も又

群馬 小菅 澄重

京都 中西 衛